

野球部

二十年間の主な大会成績

※君津支部以上の大会で3位以上の順位のみ掲載

平成十三年度	君津支部新人大会	第三位
平成十六年度	君津支部新人大会	第三位
平成十七年度	君津支部新人大会	準優勝
平成十八年度	君津支部新人大会	第三位

最終年度の顧問として

山下 章 吾

四月から野球部の顧問として活動を始め、一番生徒たちに伝えていきたいと思ったことは、スポーツ選手としての心構えの部分です。私自身、野球経験がなかったため、技術面での専門的な指導を行うことができませんでした。そのため、挨拶や道具の管理、スポーツに対する気持ちの面を伝えていこうと、指導に当たりました。初めは練習の合間の移動が遅かったり、挨拶の声が小さかったりと、メリハリがありませんでした。野球ができる、スポーツができることに、感謝の気持ちを持つことが不十分であると感じたのが正直な気持ちです。今でも自分から挨拶をすることができなかったり、ボールがグラウンドに落ちていたりすることもあります。ですが、最近では練習中の移動やノック時の要求する声、説明を聞くときの顔つきがすごく変わり、野球に対して、前向きに取り組む姿勢や野球が好きという気持ちがとても強くなり、四月に比べてとても成長したと感じています。

来年度、周東中学校、初めての野球部として活動していく生徒たちが、胸を張ってグラウンドに立てるように、最終年度の清和中、野球部顧問として生徒たちに向き合っていきたいと思っています。

周東中学校に向けての抱負

野球部主将 萱野 颯 太

僕は八月から部長の鈴木君と二人で野球部の中心となりました。はじめの頃は、何をしたいのか分からなく、人に頼ってばかりで失敗や間違いが多かったです。でも先生方や仲間がサポートしてくれているので、今ではだいぶ安定してきました。

来年度の総体に向けては、今からしっかり準備をして自分たちに欠けているところを探してお互いに修正、向上しながら、「周東中野球部」として勝利を目指していきたいと思っています。

清和中野球部としては残り少ない日々を大切にしながら、野球教室や練習試合等で学んだことを活かして、「清和中の野球部つてすごいね」と言われるような態度を身につけていきたいと思っています。

周東中学校になると、環境は大きく変わりますが、チーム全員で励まし合いながら「周東中野球部」を作っていきたいと思っています。

野球部部长 鈴木 颯 真

僕は、野球部部长として「清和中野球部」から「周東中野球部」に生まれ変わっても立派な部活動として活動できるよう、少しずつ変わっ

ていかなければならないと思っています。

そのためには、一日一日の練習を大切にし、しつかりとした態度で練習に取り組んでいくことが大切だと思います。

主将の萱野君と協力しながら、新しい「周東中野球部」に向けて頑張っていきたいと思っています。

清和で学んだ野球　～甲子園への道～

大野　賢

秋元小に入学してすぐに、兄が入団していた清和少年野球団（故山田一男監督が設立）で野球を始めました。低学年の頃は、矢吹コーチが遊びを取り入れながら、野球の楽しさを教えてくださいました。四年生の頃、故　鈴木胤弘監督から投手を勧められました。三振をとった時など、凄くうれしかったです。逆に負けた時は、悔しくて練習し、投手として活躍したいと思うようになりました。

清和中野球部に入部した時の三年生には兄もいましたが、君津市選抜に三人入り、一年生大会に優勝する程、上手くて憧れの先輩方でした。少しでも先輩方に追いつけるように、必死に練習しました。長浦中で練習試合をした時、センター前ヒットが打てました。三枝先生に「頑張れ」と声をかけていただいて、嬉しかったです。故　山田さんには、毎試合のスコアや打率などの集計をしていただき、練習の励みになりました。山口先生や青木先生、金網コーチ、根岸先輩の指導で自分の代は五人でしたが、日々練習に励みました。

一年生大会は松丘中、新人戦などでは周西南中や久留里中、亀山中と合同チームを組み、戦いました。三年生になり、単独チームで出場し、春季大会で君津中に勝ち、市で三位になり、嬉しかったです。また、君津市選抜に選ばれ、大会では四番ライトで出場した事は、自信になりました。野球部で主将をやらせていただき、野球の楽しさや難しさなど、たくさん事を学びました。そして、もっと高い目標を目指して野球をやりたいと思うようになりました。

兄が通っていた高校が夏の甲子園大会に出場したので応援に行き、チームに強い憧れを持ったので、進学を決めました。

東海大学付属市原望洋高等学校野球部に入部し、投手として練習に励みました。三年生が引退した後、自分の代に、マネージャーがないと監督から話があり、悩みましたが、チームに貢献する事を選びました。仲間を支える事は難しかったですが、仲間に甲子園へ

連れて行ってもらえた事で、野球を続けてきた十二年間の努力が報われました。甲子園球場に「記録員は大野賢君、清和中学」というアナウンスが響いたのを聞いた時の感動は、今も忘れません。

清和少年野球団から本当にたくさんの方々の支えがあって、野球を続けることができました。本当に感謝しております。



バレーボール部 二十年間の主な大会成績

平成二年度	支部中学校総合体育大会	優勝	県大会出場
平成三年度	支部中学校総合体育大会	優勝	県大会出場
平成四年度	支部総合体育大会	準優勝	
平成五年度	支部総合体育大会	準優勝	
平成六年度	支部総合体育大会	第三位	
	支部新人総合体育大会	準優勝	
平成十二年度	支部総合体育大会	第三位	
	支部新人総合体育大会	第三位	
平成十七年度	支部総合体育大会	第三位	
平成十八年度	支部総合体育大会	第三位	
	支部新人体育大会	準優勝	県大会出場
平成十九年度	支部総合体育大会	第三位	
	支部新人総合体育大会	第三位	
平成二十八年	支部新人体育大会	第三位	
平成二十九年	支部総合体育大会	準優勝	県大会出場
	支部新人体育大会	第三位	
平成三十年	支部総合体育大会	第三位	
	支部新人体育大会	第三位	

(小糸中学校と合同)

清和中最終年度顧問として

今井里美

平成二十七年度から、主顧問の松本和洋先生を中心に、限られた人数の中で活動をしてきました。毎週末は、ほぼ練習試合で他のチームとゲームをすることで強くなっていました。というのも、学校の練習では、どうしても反対側のチームの人数が足りず、一人でもまたは二人で、三回以内にボールを触って返すことが恒例の練習だったからです。しかし、部員ひとりひとりがボールに触れる時間の長さは、きつとどのチームよりも長かったでしょう。

このような環境の中で、平成二十九年の春夏連続の県大会出場、平成三十年の春の県大会出場の偉業を成し遂げたことは、私の中でも大きな財産となる経験になりました。また、ボール拾いにはとても神経を尖らせました。六名びつたりしか部員のいない時は特に、誰一人ケガをさせまいと真剣でした。今でもボール拾いは練習の中で一番大切にしています。

最終年度にバレー部の顧問ができて、「巡り合わせ」の奇跡について考えるようになりました。清和地区に同じ年に生まれて、清和中に入り、バレーボールというスポーツを選んだことで、勝利を目指し、つかみ、思い出を作る。そんな「巡り合わせ」で同じチームの顧問になれたことにとても感謝しています。

清和中最後のバレーボール部として

平田 沙羅

私は今、南房大会や総体に向けて練習に励んでいます。今年は清和中最後のバレー部として大きな責任があります。しかし、部員は四名しかおらず、小糸中と合同チームとして練習を行っています。大変だと感じることは、土日、祝日のように休みの日しか一緒に練習することができないことです。しかし、一人一人が意識して取り組みればその壁ものりこえることができると私は考えています。

今後の私たちの課題は、部員十八人全員が揃って練習をするということです。まだ、一度も全員が揃って練習をしたことがありません。練習に全員が揃うことからまずはスタートしたいです。

二つ目は、一緒に練習できないことを言い訳にせず、一週間それぞれの学校で練習をし、土日の練習試合や合同練習の時に発揮したいと思っています。そして、私個人の目標は周東中へ行ったら全体のキャプテンとなるので、自分自身を強くしたいと考えています。スパイク、トス、サーブカットがしっかりとできるように基礎練習を大切にして頑張りたいです。

「清和中最後のバレー部とともに…」

松本 和洋

幼い頃、三島中や開校したばかりの清和中に、当時のバレー部顧問であった父に連れてこられた記憶がある。夏の水泳特訓では二十五mの潜水にチャレンジしたり、文化祭ではステージで歌の発表をさせられたこともあった。そんな中でも、バレー部の夏合宿を行った際、自宅に多くの中学生が泊まっていたことはよく覚えている。その当時から県大会常連校であったし、私が大学卒業後すぐに産休の先生の代わりの教師として一年間勤務していた頃も、奈良輪先生の指導のもと、支部大会では優勝しており、翌年他校に勤務してバレー部顧問になつてからは常に目標とするチームであった。その清和中バレー部も、ここ数十年は他支部にいたためか、あまり県大会等での情報も入ってこなかった。

長い時が経ち、平成二十七年四月に縁があつて、久しぶりの清和中での勤務となり、この伝統あるバレー部は何名いるのかなあと楽しみをしていると、コートで練習していたのは三年生の小倉陽奈さんと榛澤愛里沙さんの二名と二年生の石和田南美さん一名のたった三名だけであつた。たしかに着任式で全校生徒が四十五名と聞き、あまりの少なさにびっくりしていたので仕方がないとは言え、何とか早くチームを作りたいと思い、すぐに入学した女子七名を一生懸命に勧誘した覚えがある。結局、五名の新入部員が入部し、八名でスタート。すぐに春季大会に向けてのチームづくりが始まった。下級生四名が固定のレシーバー、エースの小倉さんがすべて攻撃するという変則フォーメー

シオンで大会に臨んだ。春の大会は初戦突破、最終的に夏の総体初戦では、それまで負け続けていた君津中にフルセットの末、勝利を勝ち取り、続く県大会出場校の大貫中戦でもフルセットまで粘ったが、三セット途中でセッターの榛澤さんが足を負傷してしまい、涙の退場。惜しくも試合には敗れたが、最後の大会で素晴らしい六セットを戦ってくれた。小倉さんは孤軍奮闘の戦いで、おそらくこの大会では全選手の中でも打数が一番多かったと思う。

この三年生の姿を身近であこがれの目で見ていた一年生が、志を高く持ち、明るく元気にバレーに取り組んでくれた結果、その後の松本杯争奪市内一年生大会では優勝、支部でも三位に入賞する。この年の主将石和田さんはたった一人で下級生五名を引っ張りながら、そして苦勞しながらも最後まで責任を持って伝統を引き継いでくれた。夏以降、新人戦や南房大会などすべての大会でベスト四以上の成績を収めてくれ、いよいよ最終学年を迎える。春季県予選大会では苦戦しながらも十年ぶりに県大会出場を決めてくれた。千葉県中学校バレーボール選手権大会でも初戦で県大会常連校の鎌ヶ谷四中に2-1で勝利、続いて県大会ベスト8の富里中に1-2で惜敗したものの、成長した姿をみせてくれた。その勢いのまま市内大会では優勝、夏の支部総体でも準優勝で、こちらは二十六年ぶりで県総体出場という快挙を成し遂げた。主将の平田月美さん、前田亜希さん、平野希さん、小泉明穂さんといった個性豊かなサイドアタッカー陣をセッター鈴木瑠衣さんが見事に操り、とにかく明るくつなぎ負けない好チームであった。その先輩たちから引き継いだ六名での新チームは清和中最後の単独チームでプレッシャーを感じながらも、伝統を守りきり、市内大会は

準優勝、支部の各大会ではベスト4を死守。夏の総体後、県の第一回中学生ビーチバレーボール大会にも参加、見事に県ベスト8に入り、最後まで部活動をやりきった。主将でセッターの成川千遥さん、サイドアタッカーの鈴木風花さんと二年の平田沙羅さん、ミドルブロッカーの服部叶夢さん、ライトの佐野里花さんやレシーバーの平野楓さん、みんなバレーボールは初心者で小柄な人もいたが、バレーボールを愛し、仲間を思いやり、日々成長してくれたチームだった。

そして、いよいよ本当に清和中最後のバレー部員となった二年生平田沙羅さんと一年生松本泉海さん、森綾乃さん、澤邊由衣さんの四名は、小糸中との周東中を見据えての統合チームとして新人戦に臨み、市内大会準優勝、支部新人大会も第三位を死守することができた。

この清和中バレー部の伝統をしっかりと引き継いで、毎日バレーボールに真剣に取り組んできた歴代の生徒たちはもちろんだが、何といっても感謝すべきことは、とにかく清和中保護者の方々が、いつも温かく協力的で、子どもたちを応援してくれることである。時に急な練習試合でも快く送迎をしていただき、強化に対してのご理解があったからこそ今現在までの部活動が成り立っている。このわがままな顧問に対しても大変ご理解をいただき、本当に感謝している。よって、市PTAバレー大会の際は毎年、生徒たちと応援に行くが、日頃の感謝の気持ちを込めて、大きな声援を贈る子どもたちの姿は、親子の絆がよくわかるシーンである。

最後に、生徒に贈るメッセージはいつも「練習なくして何の勝利かな」「継続は力なり」。「運動が苦手ならば、頭を使え。頭が悪いと思えば、汗を流せ！ 力で勝てないならば、負けない工夫を、」

ということをモットーとした上で明るく、いい顔をしてバレーボールを戦うチームづくりを目指した。三年前に購入した部旗に刻まれている言葉『今こそ見せろ！ 清和魂』、その前の部旗の『小さければ高く飛べ！』というそれぞれの意味をバレーボールではもちろんのこと、今後の人生でもぜひ教訓として理解しながら、清和中で過ごした日々を忘れることなく、次の夢に向かって努力してほしいと思います。清和中学校、五十年間本当にありがとうございました。清和中バレー部での想い出は永遠に…

卓球部 二十年間の主な大会成績

平成二十六年 度

君津支部新人体育大会

個人戦 女子 ベスト12 神子 真穂 (県大会出場)

平成二十七年 度

君津支部新人体育大会

個人戦 男子 ベスト8 榛澤 拓也 (県大会出場)
女子 ベスト12 石井 美夢 (県大会出場)

平成三十年 度

君津支部新人体育大会

個人戦 男子 ベスト12 溝口 海斗 (県大会出場)

清和中最終年度顧問として取り組んだこと

唐 鎌 紗 絵

私は、節目となるこの年に卓球部の顧問として活動しています。初めて卓球部を持つということもあり、四月、最初は緊張し不安もありました。しかしそのような中、生徒が笑顔で「よろしくお願いします。」と声をかけてくれたことで、私も自分にできることを精一杯行っていたと前向きな気持ちになりました。卓球については知らないことが多くありましたが、技術以外の面では積極的に関わっていったという思いで取り組んできました。部活動に取り組む姿勢というものは、どの部活動でも共通することはあると思います。挨拶、準備や片づけ、大会での態度など、自分の経験を思い出しながら活動しています。また、練習の中で技術について詳しくアドバイスをすることは私には難しいですが、生徒と一緒に練習に参加し、球出しをしたり、基本の練習やゲームをしたりすることで、生徒の活動をサポートしてきました。三年生が抜けた後は、部員4名という少ない人数の中で、私が一緒に練習を行うことで少しでも練習に幅が生まれたら嬉しい気持ちで日々の練習に取り組んでいます。

周東中学校の卓球部となっても、生徒たちが自信を持ってしっかりと動けるように、日常の練習や大会などでのサポートを行っていきます。

周東中学校での抱負

卓球部部长 溝口 海斗

来年度は、周東中学校での生活が待っています。部活動も今と違って、人数も多くなります。どんな感じになるのか、不安はたくさんあります。でも、僕は、清和中卓球部の部長として、小糸中卓球部の部長と協力して、よりよい部活動にしていけるように、精一杯頑張りたいと思います。

今年度に入ってから、本格的に合同練習を始めました。小糸中は、様々な戦型があるので、お互いに学べるところがたくさんあります。これからも共に練習していくことで、良いところをお互いに吸収して、一緒に上達していけたら良いと思います。そのために、まずは清和中の一人一人が強くなる必要があります。僕は、素早く動けるように体力をつけ、回転のかかるサーブを練習して、県大会に向けて頑張りたいと思います。チームとしては、基本練習に力を入れ、サーブからの三球目攻撃を中心に取り組んでいきます。

そして、まだお互いのことで知らないこともあると思います。新チームとしてまとまっていくために、僕から大きな声で挨拶をしたり、積極的に話しかけたりして、距離を縮めていきたいと思っています。

最後に、来年度、周東中に行ったら、総体へ向けて新しい仲間とたくさん練習をして、団体戦でも県大会に行けるように、力を合わせて頑張りたいと思います。

卓球部と私

神子 真穂

私が清和中での生活で一番青春だったと感じているのは部活動です。私は卓球部に所属していました。私がいた頃の卓球部の部員数は、男女合わせて二十人程、女子に至っては九人しかいませんでした。実は私が卓球部に入ったのは、「チームプレーで足を引っ張りたくない」というネガティブな理由からでした。ですが清和中卓球部で過ごした三年間は、私に高校でも卓球を続けさせてしまうぐらいに素敵なものでした。

私たちの部活は人数が少ないので男女一緒に練習していました。みんな仲が良くてとにかくにぎやかでした。普段の練習ではお互いに教え合ったり、休憩時間になっても好きに打っていたり。夏にはみんなでスイカを食べて、冬休みにはクリスマス会も開きました。本当にいつもわいわいやっていた気がします。私はみんなと本気で戦える部内リーグが好きでした。今まで勝てなかった相手に勝てたり、逆に急に後輩に負けてしまったり毎回ハラハラドキドキでした。最後の部内リーグでやっと一位になることが出来たときにはとても嬉しかったことを今でも覚えています。

卓球部での思い出で一番印象に残っているのは二年生の新人戦です。この大会で私は念願の県大会出場を果たしました。代表決定戦はフルセットでとても苦しい戦いでした。試合終了後、対戦相手が泣きながら「県大会頑張ってください」と言いに来てくれたのを覚えています。この大会の一年前、当時のダブルスのペアだった子が県大会に出場してから、私の中では一歩リードされてしまったという焦りがありました。

た。そのため私にとってこの結果は本当に嬉しいものであり、この先卓球を続けていく上での自信にもなりました。

もちろん苦しくて悲しいこともたくさん経験しましたが、いい仲間や先生に恵まれて最後まで卓球を好きでいることができました。清和中卓球部の歴史はここで終わってしまいますが、その一員として過ごせたことを誇りに思い続けます。

剣道部

剣は心なり 心正しからざれば

剣また正しからず

小泉 正子

私が剣道部顧問になって以来、ずっとこの言葉を念頭に置き指導してきました。剣道の目的は人間形成です。素直な清和中の部員達は、私の教えを守り、剣も心も立派に成長し、たくさん感動を与えてくれました。

・平成十八年支部大会 三十四年ぶりの「優勝」

三十七期生（奥村・石井・鈴木・田中・重田）が三期生以来の三十四年ぶりの支部優勝という快挙を成し遂げた。本当にすばらしい戦いぶりだった。一度も勝ったことのない天羽中に勝ち、攻めの剣道に徹して優勝。大きな偉業を達成した部員達を改めて誇りに思った。何よりも嬉しかった事は、わが清和中は、純粋な部活動だけで頂点を極めたことだ。佐貫・天羽・小糸は、部活動プラス社会体育で九時頃まで

稽古している。正直言っても焦りを感じていた。練習量では完全に負けているからだ。どうやったら、限られた時間の中で、力をつけてあげられるだろうか。日々考え、内容も変えていった。そんな私の思いを部員達は、見事に受け止め、実践してくれた。防具をつけての朝稽古。三十分間の愛のかかり稽古。剣道ノートは、試合を分析し、相手を研究するためにも役立った。そうした日々の努力が実を結んだ。「努力は報われた」瞬間だった。

・四十二年間剣道部最後の支部大会三位

四十二期生（東・作本・小泉秀人・小泉裕人）

四十三期生（伊藤・舟越）

廃部が決まった時、みんなで誓いを立てた。「みんながいい形で、笑顔で終われるように」正にその通りとなった最後の試合だった。そして道場の神様は知っていた。榊がいつも青々としていたことを。試合の前には拝礼をして出陣していたことを。日々の稽古に励んでいた部員達の姿を。四十二年間の歴史ある道場が幕を閉じることもすべてお見通しで、最後の試合に褒美をくださった。二四三名の歴代の先輩たちが後押ししてくれた最後にふさわしい戦いとなった。

すばらしい生徒達と保護者と出会えた最高の七年間でした。清和中がなくなるのは本当にさみしい限りです。ありがとう！ 清和中